

困った問題

桂 信子

類似句、類想句といった問題は、このごろのように多くの人達が俳句をつくり、俳誌が増えてくると必ず起こってくるはずのものであり、今後ますます取沙汰されるようになるだろう。何分、俳句は十七音しかないから、いくら良心的に作っても、人の考えることはだいたい似たりよったりでつい同じような表現をとりがちだ。私自身のことで言えば快心の作といえないまでも、いい句ができたとき、かえって不安になり、この句はすでに誰かにどこかで作られていたのではなかったかというように思いが身をさいなむ。いったん思いはじめたらもういけない。自分の覚えてるかぎりの俳句にないとしても、いつか読んだ句が無意識に出てきたのではないかと疑いぶかくなる。たとえばそれが松本たかしの句に似ているのではないかとというような場合はわりあい調べやすい。時間をかけても、手間をかけても探すことができるからである。しかしどこかにありそうでいったい誰の句かわからない場合、もうお手上げだ。胸にもややとしたものを蓄めたままその句はほっておかれることになる。ただひとつ残された手段は、このような句をなるべく句会に出すことだ。誰かが覚えていて、これは誰々の句に似ているという。そう

じ、私は若者の姿をおもい描き、澄雄氏は女を描く。作った時期もたぶんおなじころであつたろう。私は発表しなくてよかったと思つた。これは全くの偶然なのである。人間は全くなじようなことを考えるものだと思つた。昨年十二月はじめ、森澄雄氏にお逢いする機会があり、このことをお話しした。澄雄氏も「おおそりでしたか」とおどろいておられた。

私は巨大なコンピュータにすべての句が登録されて、もし疑問がおきた場合、すぐダイヤルをまわせば立ちどころに電話で答えてくれるような時代が来ないものかと時々思うことがある。しかし今は夢のようなことである。私は相当名のしれた俳人の句をよんで、よく類似句に気づくことがあるが、一々それをとがめだてする気持ちはない。自分だつて知らずにそんなことをしているかもしれないのである。ただ、自分の句が類似句と気づいたときは句会の段階で捨ててしまふ。それはすべて作者個人の問題で、ひとのことをとかくいうつもりはない。ただ若い人達にはできるだけの注意はする。

ただ私がいつも苦々しく思うのは、何々大会などと名づけられ賞の出る会に、賞目あての句がまじっていることだ。いつか『俳句』を何気なく見ていたら消息欄に、福島県かそのあたりの県大会の記事が紹介されていた。そのなかの選者の特選句に、

書を重く 青年 通る 冬 座 敷

とかいのがのつていて（春か冬かいまはつきり思い出せないが）

おどろいた。これは私の四十六年作（『新緑』所載）の、

書を重く 青年 通る 夏 座 敷

の季を一字入れかえただけではないか。それはあきらかに意識して賞目あてに作った句に違いなかった。しかし選者のほうでは、全国

だったのかとこちらも胸を撫でおろす。長い間の胸のつかえが解けてほっとする。また句会では私はよく人の句を批評して、これは誰誰の句に似ているから注意するようにということがある。それが親切というものだと思う。たいいていは知らずに作っているのである。いつか信州の温泉へみなと吟行に出かけたことがある。宿の温泉はひろくいい気分、何度も湯に浸りながらそのあとの句会に出す句を考えていた。

山の湯の湧きつづきつつ木の葉散る

黄落や片膝立てて山の湯に

そんな句ができたのでその夜の句会に提出した。少し点がいっぱように思う。帰ってから留守中に来ていた『俳句』を何気なしに見ると、右城暮石氏の句のなかに、

夕立に片膝立てて西行像

というのがあるではないか。しかし私はあのとき何も知らずに作り相当愛着のある句だったので、これは取り消さずに発表することにした。もちろん先に右城氏の句を見ていたら私はそのような句は作らなかったであろう。またこんなこともあった。これは昨年のことである。私はある句会に、

豊年や乗りまわしいるオートバイ

という句を出した。点はあまりはいらなかった。誰かひとりとしてくれたようだった。それでというわけではないが、どこへも発表せず句帖に書いたままになっていた。それから半月ほど経って「杉」十月号がきたので何気なしに森澄雄氏の句を見ると、

豊年や女が乗れるオートバイ

という句のついていた。「豊年や」もおなじ「オートバイ」もおなじ

の俳人の全句を覚えていたわけにはゆかず、よい句と思えばとらざるを得ない。私もいつかある紙上俳句会の選をたのまれ、秀逸にとつた句が、虚子の歳時記にのつていたのとそっくりだとあとで知らされおどろいたことがある。しかしそのときは賞はなかったし、投句した人の不注意であろうと思ひそのままにした。こういう場合は本人の良心に問う以外に方法はない。

賞目あてにわざと他人の句を投句した場合、その人は句を作るよろこびを自ら放棄しているわけで、そこには寒々としたところだけしかのこらない。そうした場合人がとがめるより、本人の心がいつまでも傷つけられ、その人の一生に暗い影を落とす。俳句はそういう人にきびしく、いつかは俳句からとがめを受けるだろう。結局は自分の良心に問うて恥じないならばそれでよいと思うのだからどうであろう。

田川飛旅子 主宰

俳誌

陸

半年分三〇〇〇円
一年分六〇〇〇円
(送料共)

入会希望者は左記に乞照会

一六四、東京都中野区上高田二二二一三

陸 発行所

振替東京五一六八〇五八
電話 (三三六) 二四二六